

Title	都市銀行の競争戦略-多角化戦略の実際とその運用-
Sub Title	
Author	小田裕之(Oda, Hiroyuki) 青井倫一
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1997
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1997年度経営学 第1332号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001997-1332

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都市銀行の競争戦略 —多角化戦略の実際とその運用—

本研究は、日本経済の再生には金融部門の再生が前提であり、金融部門、特に銀行の経営戦略の設定が鍵であるとの立場に立っている。そして、多角化戦略を所与のものとして、その戦略を実行するに当たり、内的な整合性を検討することが目的である。

この研究の基本的問題意識は、営業力と調査力の「効果的結合」の可能性を探ることによって戦略の内的整合性を高めることができ、そうすれば日本の銀行業はもっと実力を発揮できるのではないかというものである。したがって、ここでは、あえて業態論や金融システム論ではなく、戦略の内的整合性の在り方に注目したものである。

本研究では、まず、現在のような業務体系になった背景としてのメインバンク論とユニバーサルバンキング論を文献研究によりレビューし、その後、多角化戦略の有効性を範囲の経済性の概念を用いて実証分析を行う。しかし、ここではデータの制約から明確な結論を導くことはできず、むしろこの方法論の限界性を検討し、その上で、情報の効率性の概念を導入することで、内的整合性の在り方を追求し、東京三菱銀行の事例研究を行った。ここでは、銀行を機能毎に分解し、それぞれの機能についての効率性を検討した後、全体に戻して検討を行った。

以上の研究からの結論として、それぞれの機能についての最適なコーディネーションの形態は得られ、しかし全体として実行する時に各機能の重複した実行部隊である支店群のコーディネーションが戦略の変化とマッチしていないことがわかった。